

松本清張とその時代

第三回

高橋新太郎

清張の父峰太郎は、鳥取県日野郡谷戸村（今の日南町矢戸）の田中家の長男として生まれた。だが、峰太郎の母は、懷妊の段階でなぜか離別され、峰太郎は生まれるとすぐに西伯郡米子町（今の米子市）の松本米吉・カネ夫婦の養子としてもらわれてゆき間もなく母は復縁し、五、六年後に田中家の次男を産む。峰太郎は小学校を卒業後、役場につとめる。

峰太郎は、小学校を卒業するとすぐ役場の給仕に雇われていたらしい。そのころから、当時の習慣で漢文など勉強していたようだが、その給仕も間もなく辞めて郷里を出奔した。

（中略）

峰太郎の出奔は、生涯ふたたび郷里に足を入れることのない、最後になつた。津山から大阪に歩いて行つたが、そこで何をしていたか私には分らない。次の父の話は、彼は突然明治二十七年の日清戦争のときに広島県の警察部長の家で書生となつている。（『半生の記』——父の故郷）

当時の、向学心に燃えた小学校高学年生徒の実力のほどは、博

文館発行の『幼年雑誌』（半月刊・明治二十四年一月創刊）『全国小学生徒少年筆戦場』（明治二十四年三月）などの雑誌からも窺える。松本峰太郎が、米子から出雲街道を津山への路をたどり、家郷を離れたのは十七、八歳の頃という。

広島は、日清・日露の両戦争の際には、大本營が置かれた軍都である。警務部長の書生働きの間に峰太郎は法律等の勉強をする。だが、これも警察部長の転任で頓挫し、衛戍病院の看護雜役夫などを経る。戦中・戦後の軍の衛戍病院は、傷病兵の手当てに追われる日々であつたろう。この間に、紡績女工の岡田タニと結ばれやがて北九州に渡る。

相変わらず両親の貧乏生活はつづく。もつとも、子供は私一人でなく、私が生れる前に姉一人がいた。これは嬰児のときに死亡し、結局、私だけが育つたというわけだ。

「これを見い。おまえが赤ん坊のときに、これを着せて育てたんだな」

母は古い葛籠をあけてボロ布片で縫り合せた兜兎の籠片を出してみせることが多かつた。それは子供が育たないので、

この子だけはということから市内を巡礼してほうぼうの家の寄進で集めたボロ布片を襦袢に縫い合わせたのだという。

（同、父の故郷）

明治四十三（一九一〇）年、清張一歳の時、峰太郎・タニ夫婦は、生活の拠点を下関市旧壇ノ浦に移し、養父・母松本米吉・カネと生活を共にする。米吉・カネは、街道の通行人相手の餅屋の商いをする。米吉は翌年他界している。

今は下関から長府に至る間は電車が通じているが、当時は海岸沿いに細い街道があるだけだった。現在、火ノ山という山にケーブルカーがついて展望台が出来ているが、その場所

が旧壇ノ浦といつて平家滅亡の旧跡地になつていて、そこに一群の家が、四五軒街道に並んで建つてた。裏はすぐ海になつてるので、家の裏の半分は石垣からはみ出て海に打つた杭の上に載つていた。私の家は下関から長府に向つて街道から二軒目の二階家だった。

（中略）父はそのころどのような職業に携つていたかよく分らない。もともと労働が嫌いで、後年、私の記憶のはつきりするところには米相場や無尽会社みたいなことをやつていたから、楽をして儲けようという気持があつたらしい。（中略）家の裏に出ると、渦潮の巻く瀬戸を船が上下した。対岸の目と鼻の先には和布刈神社があつた。山を背に鬱蒼とした森に囲まれ、中から神社の臺などが夕陽に光つたりした。夜になると門司の灯が小さな珠をつないだように燃く。

母の妹がいて、その亭主が鯨のボテ振りをしながらこの辺まで来て、よく店先で休んだ。手首に桃の刺青があつた。酒をよく呑む男であった。

ついでに言うと、母のたつた一人の弟は九州で炭坑夫となり、すぐ下の妹がこの魚の行商の女房であり、その下が山口県二田尻というところで陸軍特務曹長の女房だつた。

（同、父の故郷）

峰太郎一家の下関移住は、妻のタニ方の地縁を頼つてのものだつたのだろう。



博文館より刊行された「幼年雑誌」（明治 24 年 12 月の号）

母は一字も読めなかつた。父は、それからくらべると新聞

をよく読んでいて世間一般の常識は心得ていた。

父は政治記者に多く興味をもつていて。広島県の警察部長

の書生のようなことをしていたころ、法律のことをかじつていった名残りかもしれない。そして当然なことに、その政治関心は基本的なものではなく、政治家の勤勉のようなものに一種の憧憬をもつて注がれていた。また、ふしきに歴史に詳しかった。これも講談本から仕入れた知識とはいえ、いま聞いても決しておかしくはない。

冬の夜、足を炬燵に突込んで父の手枕で聞く太閤記などがどれくらい面白かったか分らない。今おぼえているのは賤ヶ岳の合戦のくだりだ。

「大徳寺で焼香争いが起つたとき、秀吉が三法師君を抱いてしづしづと現れた。この人こそ信長の孫でほんまの相続人ちゅうての、柴田勝家を尻目にかけて仏壇の前にすんだのじや。勝家がおこつてつかみかかるうとすると、寺の襖がパツと開いた。勝家がみると、寺をとりまいた山という山、野という野には秀吉方の軍勢がいっぱいになつて、旗をなびかせ、ホラ貝を吹いていた。さすがの勝家もこのありさまを見て腰をぬかし……」

と聞くと、幼い私の眼には、大徳寺をとり巻く山のかたちが、毎日見なれている火ノ山になり、そこにひしめいている甲冑に陽がキラキラと光つて映るのだった。

(同、白い絵本)

差詰め、NHKの大河ドラマの世界に見られる光景だが、清張

の歴史への関心は、父峰太郎の手枕の内で、刷り込まれていたのだろう。

そのとき住んでいた旧壇ノ浦の家は、六、七軒あつたが、うどん屋が一軒、人力車の溜り場が一軒のほかは、船大工、漁師といった商売だった。そこから長府までは約六キロの道程で、近くの祭りといえば、赤間宮の先帝祭と、長府の乃木神社の祭りであった。

先帝祭の記憶はあまりない。花魁の道中がおぼろに印象に残つてゐる程度だが、乃木神社の祭りはかなり強い記憶になつてゐる。乃木大将の勲章を着けた童服姿が子供心に珍しかつた。

一度、近所の人力車に乗せられて乃木神社に父といつしょに行つたことがある。煎餅か何か買つてもらつたが、それが私の幼時の最大の贅沢であつた。

(同、白い絵本)

先年夏、病後の力試しの思いもあつて森鷗外記念会ツアード

小倉から津和野へのバス旅行を楽しんだがその途次、赤間宮や乃木神社周辺の散策の機会もあつた。瀬戸の早潮を見つめながら、清張の『半生の記』に想いをめぐらしていた。あいにく清張少年が食べたであろう乃木せんべいは試食することが出来なかつたが、小倉からのバスの旅は、清張文学の旅でもあつた。

安徳天皇と平家一門への回向として行われる赤間神宮の先帝祭は、四月二十三日から二十五日にかけて催され、とくに二十四日の「上禱參拜」が有名で、清張の記憶する「花魁の道中」はこれ

東映で映画化もされたアリバイ崩しの推理小説『点と線』の舞台の一つに下関も登場し、『時間と賀俗』では、門司の和布刈神社で行われる和布刈の神事の写真が事件を解く鍵ともなつた。旧正月の早朝の和布刈の神事は、関門海峡の西岸で行われるが、下関側の住吉神社の神事は、秘祭としてのしきたりが守り続けられてゐる。

大正二(一九一三)年、清張四歳、街道に鉄道を敷設するためにダイナマイトで山を崩しているうち、地すべりが起き、家を押しつぶされ、そのため、下関市田中町に移る。

そのころ父の生活が少しよくなつて、法律の知識が少

しるので裁判所によく出入りをした。示談屋みたいなことをやつていたのはなかろうか。とにかく、朝早く母の手伝いで餅を揚ぐと、ぞろりとした絹物に着、更え、祇日(ひのひ)の下駄をはき、裁判所に出かけた。無尽のようなこともはじめていた。(中略)

そのころ私は眼をわずらい、失明寸前になつた。このときは母が一生懸命になつて、医者にはかけずに出で弘法大師に頼つた。(中略)

そんなときだつたが、父には女が出来ていて、始終、そこ

に通つていた。それは遊廓の女だつたらしく、母は私を背負つて遊廓を尋ね歩いた。

(中略)父の道業で家の中が苦しくなつた。祖母は他家の女中となつて出て行つた。(同、白い絵本)

大正五年、清張は下関市立舊教尋常小学校に入学する。

ある日、校門を出ると父が電信柱のかげにぼんやりと立つている。きたない身なりをしていた。遊びにこい、というから、久しぶりに会つた父に何となく恥ずかしい思いでついて行くと、そこが木質宿であつた(同、白い絵本)。

『放浪記』の林夫美子は言う。



川北電気会社の給仕をしていた16歳の頃の松本清張



時代の亀井光

島の温泉宿の娘である。母は他國者と一緒になつたというので、鹿児島を逍遙されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関といふ處であつた。私が生まれたのはその下関の町である。(中略)今私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、実直過ぎるほどの小心さと、アプローマルな山々氣とで、人生の半分は苦勞で埋もれていた人だ。私は母の連れ子となつて、この父と一緒になると、ほとんど住家といふものを持たないで暮して来た。どこへ行つても木質宿ばかりの生活だつた。

林美美子の、鹿児島市役所に残る戸籍上の生年月日は、明治三十六年十二月三十一日である。

私はほんとうは五月に生まれたのだそうです。産婆さんもいらないほど、かるいお産だつたと、母は云つていました(「人の生涯」)。

下関市立図書館長をつとめて、亀山叢書第十四輯に『林美美子と下関』の著もある中原雅夫に拵ると下関市立名池小学校に残された学籍簿によると、林フミ子は保護者林キクの私生子で明治四

倉製紙・九州電気軌道・同附風発電所・同附風塩酸加里製造所・小倉鉄道・大阪曹達(新)・大正電球(新)・日本陶器製造工場(新)・九州鉄道小倉工作所など、新設工場は柴川・板櫃川の水利に添つて集中している(『門司新報』)。同年九月一日からは、工場法が施行され、職工十五人以上の工場で十二歳未満者の就業を禁止し、また、十五歳未満ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十二時間ヲ越エテ就業セシムルコトヲ得入)としながらも、十五年間は、二時間以内の延長を認めるなど、資本家側の圧力による例外規定の付加については、第一回で述べた通りである。

大正六年一月三十一日に、紫川製紙会社創立総会開催。市外地の中島のバラックから、天神島尋常小学校に通うことになつた清張は、こう回想する。

(中略)家の前には、白い灰汁の流れる小川があつた。近くの製紙会社から出る廢液の臭気が低地に漂つていた。しかし、住んでみると、その悪臭を嗅がないと自分の家でないような気がした。学校がひけて、その灰汁の臭う橋まで帰ると、私ははじめてわが家に戻つたような気安さを覚えた。

(同、奥う町)

大正六(一九一七)年は、ロシア革命の年であり、翌七年は、八月に米騒動が各地に拡がつた年である。十月の司法省調査によると、全国各検事局で、起訴された者六千八百十一名、騒擾の無かつた地方は北海道・青森・秋田・盛岡・山形・宇都宮・千葉・浦和・前橋・鳥取・長崎・大分・那覇で、福岡県下で起訴された

十四年一月十日佐世保市八幡女児尋常小学校から名池尋常小学校に転入学し、大正三年十月六日に鹿児島の山下尋常小学校に転校するまで、第一学年(夏季から第四学年)冬季まで、在学しており、大正五年には更に尾道第一尋常小学校へと移つてゐる。現在田中町五穀神社境内には生誕の地の碑が建つてゐる。

松本清張は、六歳年長の林美美子とこの時期、同じ田中町で、

ほぼ同じような環境の下で、地域の風を三年間共有していたことになる。父峰太郎がようやく家に戻り、再び小倉に移ることになる。大正六年古船場町の錢湯亀井風呂の釜たきをしてゐる母の知

人の奥田という老夫婦を頼つて、風呂の裏手にある六畳(闊ほど)の家の間に一家三人で間借りする。清張は市立天神島尋常小学校の五年生に転入する。父峰太郎はその年の暮からその風呂屋のある両場に近い旦過橋の上で塩漬の立ち売りを始めた母と共に縁日の露天商を営んだ。やがて町外れの中島に板囲いのバーラックを借りる。

松本清張が舊義尋常小学校入学の大正五年前後の世相を、北九州地方社会労働史年表等に拵りながら描写すると、前年の大正四年十月二十九日に、小倉市内の師範学校・中学校・工業学校・高等女学校・小学校の校長や関係職員で構成する小倉教育懇話会

が、その第二回例会で、「当令あらゆる興行を凌駕して其努力を拡めん」としつつある「活動写真の市内学生の觀賞禁止を決めている。大正五年六月頃の小倉市の工業近況として、大阪砲兵工廠小倉工場の門司よりの移転と時を同じくして、今春來各種新工業勃興し多くの職工人夫等市附近に集りつある」と報じられ、主なる新設・既設の工場は、東京製鋼第一分工場・同第二分工場(新)・小

者は六百九十六名にのぼつた。(『門司新報』)

大正十一(一九二二)年、小倉市立板櫃尋常高等学校(のちの清水小学校)高等科に入学する。天神島尋常小学校時代の一級上に、古船場生れの亀井光がいた。

交際といえば、前に間借りをした奥田家だけだつたが、その風呂屋の持主に息子がいて、よく「亀井の坊っちゃん」という話を聞かされた。私よりは一つ年上で、学校はいつも首席だった。小学校を卒業すると小倉中学校に入り、それからどこかの高等学校に移り、東大に入った。「亀井の坊っちゃん」はのちに労働省の事務次官になつた。

(同、奥う町)

亀井光は、小倉中学・福岡高校・東大と進み、在学中に高文行政科試験合格。東大法科卒業後、兵庫県警防部長・厚生省住宅課長を経て、戦時中はジャワの軍政官として転出、昭和二十一年五月に復員。厚生省労働局監視課長・失業対策課長・労働者会計課長・労働基準局長・労働省事務次官等を歴任したのち、福岡県知事として活躍する。

昭三十六(一九六一)年五月國税厅発表の三十五年度所得額で松本清張は作家部門のトップとなり、杉並区高井戸に自宅を新築。翌三十七年、清張は思い出の母校天神島小学校(現・小倉中央小学校)にピアノを寄贈している。

私が高等小学二年生のときによく父にも芽が吹いて、前に住んでいた亀井風呂の近くの納屋町というところに、小

さな飲食店を出すようになつた。だいぶん借金してやつたらしかつた。その頃が母にとつて「全盛」であつた。商売柄、女中を三人ぐらい使つていた時期もある。(中略)だが、父の例のずぼらから、この店の景気も次第にさびれるようになつた。

清張の父峰太郎が小倉市内の紺屋町一丁目に飲食店を持つたのは大正十二年であつた。翌大正十三年に清張は板橋尋常高等小学を卒業する。

(同、奥う町)
小学校高等科を卒業する前に、教師は就職の希望をわたしに聞かなかつたが、それほど熱心ではなかつた。もつとも当時はすでに不況で求人先もなかつたようである。(高度経済成長のころ、中学卒業生が「金の卵」として企業に奪い合いつなつてゐるのを新聞で読んだとき五十年近い昔との比較を思つたものである)。

そのころのわたしは瘦せて顔色も蒼かつた。小学校では「青」というアダ名があつたくらいである。工員の口はあつたが、肉体労働は無理だろうというので、父が小倉の職業安定所にわたしをひっぱつて行き、給仕の口を世話してもらつたのだつた。

(雑草の実)

大正十一年七月一日から職業紹介所法が施行されていた(前年四月九日公布)。大正十三年清張は、小倉職業紹介所を通じて、川北電氣株式会社小倉出張所に職を得る。大阪に本社があり、福岡

に支社を置く電氣製品の会社で、日給十一円であつた。大正十三年三月末現在の小倉職業紹介所の成績は、求人三三九名(女、四三名)・求職一八一名(女、四一名)で、就職者は八四名(女、一七名)であった。因みに同月末の小倉警察内の工場法適用の三十二工場中、職工解雇一九八名(女、四七名)・雇入二〇八名(女、三八名)であった。小倉職業紹介所の同年十一月末の成績は、求人三三二名(女、五一名)・求職三八一名(女、四七名)・紹介二五二名(女、二〇名)・就職一九五名(女、一九名)。求人の多いものは集金人一五名・配達四四名・店員四一名・小店員四一名・女中四九名、求職の多いものは、店員五八名・事務員五二名・配達四三名であった。

(同、市営住宅十戸)の家賃を、一戸十四円にきめた。同年小倉市は、市営住宅十戸の家賃を、一戸十四円にきめた。一戸一円の割合であつた。またこの年十一月中旬、小倉市公設市場で、白米小売値を一錢引き下げ、一等米、一升四十七錢、二等米四十六錢であつた。

さて川北電氣というのは、主に電熱器具と扇風機を造つている会社だつたがそのほかモーターも売り出していた。KDKというものがそのマークで、扇風機は業界ではトップレベルではなかつたかと思う。扇風機に付いているガードと称する、あの渦巻型の鉄線は、川北電機の新案特許になつていて、そのスマートさから、これだけは日立や明電舎、安川電機などをすつと抜いていた。

小倉出張所は、自社製品の販売の傍ら、地元に九州電力軌道株式会社という大きな会社の下請工事も請負つてゐた。(中

(略)川北の出張所は、このような会社に取り入らなければ営業ができなかつた。

(同、途上)

松本清張の読書生活は、この川北電氣の給仕時代からで、文芸書に親しむようになつたのも、この時代に始まる。

(たかはし) したたろう・学習院女子短期大学教授

原稿募集

○「清張文学と私」というテーマで原稿を募集します。

原稿は四〇〇字詰原稿用紙、一二、三枚程度、住所、電話番号、年齢、職業など必ず明記して下さい。なお原稿は原則として返却いたしませんので、予めコピーをとつておいてください。

○読者投稿欄に、松本清張の作品に対する感想、本誌に対するご意見などお待ちしております。

○送り先

〒113 東京都文京区本郷三一三一五 13番5号館ビル3F
砂書房『松本清張研究』編集部